

# 晏子内親王・慧子内親王（文徳天皇皇女）

皇女研究会

『本朝皇胤紹運録』には晏子内親王、慧子内親王の項が続けて次のように記述されている。

晏子内親王（斎宮。母藤原則子。從四位上是雄女）

慧子内親王（斎院。嘉祥三年卜定。但被廢。其事秘之。

世莫知之。母同）

この記述から、晏子内親王と慧子内親王は同母姉妹とされる。また『帝王編年記』文徳天皇の皇女の欄においても、慧子内親王には「母同晏子」と書かれている。この両内親王は、父文徳天皇の即位にあたって、同日にそれぞれ伊勢斎宮、賀茂斎院に卜定された。

『文徳天皇実録』嘉祥三年（八五〇）七月九日条

甲申。皇女晏子内親王為伊勢斎。惠子内親王為賀茂斎。

大祓於建礼門前。以命兩内斎内親王也。

慧子内親王は「惠子内親王」と異なった字が使われているが、諸史料を検討する限り、同一人物として問題はない。しかしながら、慧子内親王は、父文徳天皇が崩御する前年、天安元年（八五七）二月に賀茂斎院を廢された。その理由は「其事秘之」と明らかにされない。『古今和歌集』八八五番の尼敬信の和歌の詞書により、「母の過失か」と推測されている。

『古今和歌集』八八五番

田村帝の御時に、斎院に侍りける慧子の皇女を、  
「母あやまちあり」といひて斎院を代へられむ  
としけるを、そのことやみにければよめる

尼敬信

大空に照りゆく月し清ければ雲隠せども光消なくに

新日本古典全集『古今和歌集』

もし、本当に「母の過失」が事実であるなら、何故、同母



が生じたのではないだろうか。その混乱が様々な形で史料に記載され、結果、同母姉妹ということとなり、片方が母の過ちを理由に斎王を退くことになったのに対して、片方はなにも咎められずに任を全うしたという矛盾が生じた可能性が考えられる。ちなみに、おば・姪で同じ後宮にあがった近い例としては、文徳後宮における他の例として、冬嗣女の古子と、良房女の明子があり、少し遡っても嵯峨後宮における百済貴命と百済慶命がいる。貴命は女御、慶命は尚侍から女御となっている。近い血筋から同じ天皇に侍ることは珍しいことではない。

さてこの問題の慧子内親王についてであるが、先にも述べたように、晏子内親王と同日に賀茂斎院に卜定されたのち、天安元年（八五七）二月に廃された。その理由は「其事秘之」とされて、明らかにされない。『古今和歌集』の詞書が示すように、母に何らかの過失があり、一旦は止んだが、再度取り沙汰されて、確定したということも考えられよう。ここで今一度、この廃斎院のときの社会情勢を確認しておきたい。

『文徳天皇実録』によると、天安元年（八五七）前後の状況で特に目立つことは、地震の多発と、朝堂の最上位三名が再三辞意を上表し、そのたびに文徳天皇が却下してい

ること、および文徳天皇の病である。

地震は、斉衡三年（八五六）には実に十九回記事になり、天安元年（八五七）には十二回、天安二年は八月に文徳天皇が崩御するまで四回記されている。天変地異は天皇の治世と関係していると考えられており、文徳天皇はこうした地震の頻発とその合間の水害・雷雨等の出来事に無関心ではいらなかったはずである。この間「帝不御南殿、勅公卿賜飲侍臣如常」（斉衡三年四月一日）、「停騎射走馬之觀、不御武德殿」（同五月五日）等の文徳天皇が病と思われる記事が散見される。そしてこれらに連動するかのよう政情不安という問題が起こっている。

次の一覧は、天安元年（八五七）から始まる藤原良房・良相・源信という朝堂のトップが文徳天皇に出した、いわゆる辞表である。いずれも、文徳天皇が却下しているが、理由は病や老齢、無才等である。この時点で良房は五十四歳。当時としては老齢ともいえるが、亡くなったのは貞観十四年（八七二）、六十九歳の時であり、亡くなる時まで太政大臣であり続けたことからいっても、無才・老齢を理由とした辞表は不審である。また、この近辺に良房等の病を示す記事もこの抗表文以外にはみられない。文徳天皇との確執が窺われる所以である。良房・良相・源信は、角田文衛氏が考察されているように、決して一心同体であったと

はいえないが、その三人があたかも連携しているかのような印象を与えるこの〈抗表〉の連発は一体何を示しているのであらうか。しかも、この間に良房は太政大臣となり、従一位を受けている。良相もまた従二位に昇叙しているのである。

天安元年 一月二十一日 右大臣正二位藤原朝臣良房抗表

二十六日 良房重抗表

二月 十九日 良房、任太政大臣

二十日 右大臣良相上表

二十一日 太政大臣正二位藤原朝臣良房抗表

二十四日 左大臣従二位源朝臣信抗表

二十八日 廣齋院・述子卜定。良房抗表

三月 四日 良房重表

七日 良房抗表

四月 十九日 良房従一位、良相従二位

惟喬親王に帯剣を許す。

五月 十日 良相抗表

二十六日 良相上表

十二月 一日 惟喬親王元服

天安二年 一月 八日 紀静子（惟喬母）正五位下

十六日 惟喬親王、太宰帥

三月 十二日 宣命（近年の怪異を鎮めるもの）<sup>7</sup>  
四月 十一日 宣命（皇位の無事を祈るもの）<sup>8</sup>  
六月 三日 北野稻荷神社上空の怪異。  
十日 流星、西落  
八月二十二日 文徳天皇、発病  
二十七日 崩御

この一覧からは、文徳天皇が崩御するまでの最後の一年半余は、実に災厄と病、良房等との絶え間ない辞表の応酬であったことが改めて確認される。特に二月は、政治状況が緊迫した月であったことは明白である。良房の任太政大臣―これは、正式の手続きを経た人臣初の事例である―とされる―と廢斎院、〈更立〉と記される紀氏所生の述子内親王の卜定は、ただごとではあるまい。

何故、まさにこの時に良房が太政大臣という破格の地位を得たのか。目崎徳衛氏は「良房が右大臣より一躍太政大臣に昇進した前例を見ない人事が、外戚への殊遇か天皇の屈服の結果かも、軽々しく判断できない。」「任太政大臣が天皇の積極的かつ自発的殊遇であったとは推定しがたいように思う。」と慎重な意見を述べておられる<sup>10</sup>。良房の任太政大臣と、紀氏の内親王の賀茂斎院卜定が同月であることを鑑みれば、この前例を見ない人事は、惟喬親王冊立

への布石であったとも捉えることができる。文徳天皇が自らの娘であり、斎院であった慧子内親王を積極的に廃したとはいえない。したがって廃斎院は作爲的なものではなく、偶発的に起こった斎院側の何等かの失態であったと思われる。ちなみに、慧子内親王の時の斎院長官は、最初、是雄の兄弟である藤原関雄が着いたが、翌年病没した<sup>11</sup>。その後、藤原岑主、橘春成と変転する<sup>12</sup>。そうした人事の不安定さも失態誘発の要因の一つであったかもしれない。れも通常の政治情勢の中では、あえて取り沙汰はされないような風評の類であったのであろう。「其事秘事」という記述や、『古今和歌集』の詞書きがそれを示している。

むしろ注目すべきは後任として、紀静子所生の述子内親王が斎院となつていくことである。この述子卜定という結果が、惟喬親王にとつて有利な条件となるからである。彦由三枝子氏は「九世紀の賀茂斎院と皇位継承問題Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」と題する一連の論文において、賀茂斎院と皇位継承問題とが密接な関係にあることを指摘された<sup>13</sup>。清和天皇が即位した際、同母姉妹である儀子内親王が卜定されていることを考えても、この当時の賀茂斎院が、皇位と密接な関連があったことは認められよう。したがって慧子内親王が廃された後、直ちに紀氏の、それも惟喬親王の同母妹が斎院となつていくことは、惟喬親王冊立の布石と考えられる

のである。彦由氏は藤原氏所生の慧子内親王が、何等かの失態を犯し、斎院を退出するという好機を逃さず、紀氏側が素早く惟喬同腹の述子内親王を卜定せしめたのではないかとする<sup>14</sup>。廃斎院騒動が、一度取りやめになったのちに、確定するというすつきりしない経緯を辿っていることが、この間に、藤原氏と紀氏との間の策動が窺われる所以である。文徳天皇は、紀氏の攻勢をみて、惟喬親王冊立の可能性が現実味を帯びてきたと判断したのではないだろうか。そのために反対派である良房等へ懐柔をはかり異例ともいえる官位の昇進を容認した。これに対して、良房・良相等はこの非常に有利な官位昇進は受けつつ、こと対藤原氏という事態に対しては、ねばり強く結束して抵抗したと思われる。そして、年明けてから巻き返しを図った。それが惟喬親王の太宰帥任官である。

醍醐天皇の命により、紀貫之が中心となつて編纂した『古今和歌集』は、雑歌上八七七番から八八五番が、いずれも月を詠んだ歌となつていく。純粹に文学的考察からこの歌群については、季節の月の歌とは明確に区別されるべきものであること<sup>15</sup>、一首一首が、有機的なつながりをもっていること<sup>16</sup>等の指摘がなされている<sup>17</sup>。この月の歌歌群は、読人不知の歌を挟んで、在原業平（二首）・紀貫之そして、

問題の尼敬信の歌で構成されている。特に最後の二首は、業平が惟喬親王との関わりで詠んだ歌と、慧子内親王の廃斎院がぬれぎぬであることを匂わせる歌である（初頁参照）。

### 『古今和歌集』八八四番

惟喬親王の狩しける供にまかりて、宿りに帰  
て、夜一夜酒飲み物語をしけるに、十一日の月  
も隠れなむとしける折に、親王酔ひてうちへ入  
りなむとしければよみ侍りける

業平朝臣

飽かなくにまだきも月の隠るるか山の端にげて入れず  
もあらなむ

新日本古典全集『古今和歌集』

これらの歌が互いに繋がっているものである限り、この配列は、決して偶然ではありえない。醍醐天皇は、菅原道真を登用するなど、親政を志し、しかも天皇自身は、かの清和天皇とは皇統を別にする。『古今和歌集』は紀氏を中心となつて編纂した勅撰集ではあるが、この勅撰集にあえて清和天皇と皇位を争つたとされる惟喬親王に関わる歌と、文徳天皇の斎院として選ばれながら理由を明らかにされず廃された藤氏の斎院の冤罪を示唆するような歌を並べ

ることは、この廃斎が政争に関わるものであったことを匂わせる。良房の強引な幼帝（清和）擁立も、結局のところ二代しか続かず、藤氏自らの手で皇統の交替を行うことになった。そうした時代背景に経てきたこの月の歌歌群をよむとき、冤罪の可能性を後世に伝えるこの歌の存在意義は大きい。尼敬信は、『古今和歌集』元永本傍注によれば、「因香朝臣母」とある。藤原因香のこととされるが、詳細は不明で、この母娘が慧子内親王とどのようなつながりがあったのかはわからない<sup>18</sup>。

慧子内親王が政争の渦に巻き込まれて—そのように言つてももう、差し支えあるまい—不面目な斎院退出を余儀なくされた約一年後、天安二年（八五八）八月二十七日に文徳天皇はわずか三十二歳の若さで急崩した。暗殺を疑う説もある<sup>19</sup>。そこまで言わなくとも、病弱な体質にかかる極度の重圧によつて、力尽きたことは『文徳天皇実録』からも容易に読み取れる。二十三日、にわかにな病となり、近侍の人々が騒動失精—仰天して感う様が『文徳天皇実録』には記されている。翌日には、言語も通じなくなり、二十七日、冷然院の新成殿において亡くなった。

両内親王の誕生を推定すると、『本朝皇胤紹運録』の記載順からいつて同母であるにせよ、ないにせよ同系であるこ

とから考え、晏子内親王が年長であると思われる。文徳天皇の皇子皇女の中で、最年長は惟喬親王であることはまず間違いない。したがって晏子内親王が同年としても承和十一年（八四四）の誕生ということになる。『一代要記』は晏子内親王を「帝一女」としている。文徳天皇即位のときにその斎宮に選ばれていることからいっても、この「一女」は生母の身分にかかわらず第一番目の皇女であった可能性が高い。承和十一年生まれならば、斎宮卜定時七歳ということになる。一方慧子内親王は年子としても承和十二年（八四五）生まれとなり、斎宮卜定時は六歳。初代有智子内親王が四歳で卜定、清和天皇の斎宮である儀子内親王が六歳で卜定されたと推定できることからいっても、妥当な年齢である。

廃斎院、父帝の突然の崩御という激動の時から二十余年の後、元慶五年（八八二）正月六日、『三代実録』は、慧子内親王の薨去の記事を伝える。晏子内親王に先立つこと十九年。陽成天皇が廃される三年前であった。先の推定からいえば、薨時三十七歳ほどであったことになる。

晏子内親王に関しては、父文徳天皇の崩御によってごく順当に伊勢斎宮を退いた後、昌泰三年（九〇〇）七月二十日に薨去したことが『一代要記』の記述から判る。享年五十六歳前後。すでに醍醐天皇の御代であった。『古今和歌集』

の成立にはわずかに間に合わず、世を去ったことになる。もし存命中にこの勅撰集を手にしたとしたらどのような感慨を抱いたであろうか。それを思わずにはいられない。

（二文字 昭子）

#### ●注

1 『三代実録』は元慶五年（八八二）正月六日条において、薨去の記事を載せている。それには「慧子」とあり、『一代要記』は「斎院」の項においては「恵子」とし、「皇女」の項においては「慧子」とする。『帝王編年記』は「慧子」。『皇代記』（群書類従本）は「恵子」とする。『賀茂斎院記』は「恵子」とし、嘉祥三年七月卜定の記事を載せる。『本朝皇胤紹運録』の卜定の記事と同じ年月であるために、「恵子」と「慧子」は同一人物であると判明する。字音の通用によって、このような相違が生じたものと考えられる。なお、国史である『文徳天皇実録』と『三代実録』が双方の字を使用していることから、本稿では『三代実録』の表記をもつて記述を統一した。

2 『斎宮志』（一九八六年・大和書房）一三三頁

3 山口博『王朝歌壇の研究 桓武仁明光孝朝篇』第二章第二節「廃斎院の歌」

4 所京子『斎王和歌文学の史的研究』平成元年・国書刊行会

5 片桐洋一『古今和歌集全評釈』一九九八年・講談社

6 角田文衛『王朝の残映』（一九七〇年・東京堂）

7 天安二年（八五八）三月十一日条

宣命曰。天皇恐（見）恐（見毛）。掛畏（支）深草山陵（尔）奏賜（部止）奏（久）。頃年恠異屢示。其由（平）卜求（尔）。掛畏（岐）山陵（乃）御在所（乃）近地（尔）。汚穢事觸行（己止）不止之所致（止）ト申（世利）。因茲參議左大弁從四位上藤原朝臣氏宗。右大弁從四位下藤原朝臣良繩等（平）差使（天）奉出（須）。此状（平）且聞食（天）。無咎崇（志女）賜（倍良波）。使等（乃）申（尔）隨（天）。汚穢事可令糺潔（支）状（平）恐（見）恐（見毛）奏。

8 天安二年（八五八）四月十一日条

宣命曰。天皇（我）詔旨（止）。恐（美）恐（美毛）申給（倍止）申（久）。御心（尔）有所念行（尔）依（天那毛）差使（天）。宇豆（乃）大幣帛（平）令捧持（天）奉出（須）。此状（平）聞食（天）。安幣（乃）足幣（止）受賜（天）。天皇（平）實位無動（久）。常磐（尔）堅磐（尔）護賜（比）助賜（比）。思食（須）御志（平毛）如御意（尔）果（之）幸（倍）賜（比）。天下平安（尔）護給（比）矜給（倍止）。恐（美）恐（美毛）申給（波久止）申。

9 天安二年（八五八）六月三日条

雷雨。』此夜。左近衛大宅年麻呂於北野見之。當稻荷神社空中。有兩鷄相闘。其色似赤。相闘之間。毛羽散落。地雖相

隔。見似眼前。良久而止。此語類妖妄。而記恠也。

10 目崎徳衛「文徳・清和両天皇の御在所をめぐって——律令政治衰退過程の一分析——」『貴族社会と古典文化』所収。一九九五年・吉川弘文館

11 藤原関雄に関しては村瀬敏夫氏「藤原関雄考」（『湘南文学』第八号・昭和四十九年三月）に詳細な御論考がされている。風雅で高潔な人物であったことが窺われる。

12 藤原岑主は南家出身、橘春成は、橘諸兄の兄弟である佐為の曾孫にあたる。

13 「九世紀の賀茂斎院と皇位継承問題（Ⅰ）」（『政治経済史学』一三〇・一九七七年三月）「同（Ⅱ）」（『政治経済史学』一三一・一九七七年四月）「同（Ⅲ）」（『政治経済史学』一三五・一九七七年八月）

14 彦由三枝子「九世紀の賀茂斎院と皇位継承問題（Ⅰ）」（『政治経済史学』一三〇・一九七七年三月）

15 「九世紀の賀茂斎院と皇位継承問題（Ⅰ）」（『政治経済史学』一三〇・一九七七年三月）「同（Ⅱ）」（『政治経済史学』一三一・一九七七年四月）「同（Ⅲ）」（『政治経済史学』一三五・一九七七年八月）

16 松田武夫『古今和歌集の構造に関する研究』（昭和四十年・風間書房）

17 関みさを「配列の上からみた古今集雑歌」（『和歌文学研究』昭和三十二年・四月）

17 窪田空穂氏は「人事を自然現象に寄せて、それだけで独立した歌として、しかし主意は、人事に置いたものである。事が事ゆえに、それが自然となって、技巧を感じさせないものとなっている。」と評された。「独立した歌」との見解を示される。しかし主意が人事にあることは同じである。

18 藤原因香は、生没年未詳。平安前期の後宮女官・歌人。元慶二年（八二八）九月、散事より権掌侍に任ぜられる。従五位下。のち典侍。寛平九年（八九七）十一月、従四位下。醍醐天皇皇子保明親王の誕生に際し、賀歌を奉ったこと、時の右大臣源能有と交渉があったことが『古今和歌集』贈答歌によって知られている（七三六番歌・七三七番歌）。『平安時代史事典』による。

また、所京子『斎王和歌文学の史的研究』において慧子内親王と「あま敬信」との関係について、つながりは不明であるとしながらも、何らかの関係があったとの可能性を指摘されている（三三〇頁）。そしてその箇所注において、後藤祥子氏よりの私信として、乳母であったかとの可能性に有力なご意見であるとの見解を示しておられる（三四七頁・注6）。

19 彦由一太「文徳天皇急崩事情の史的背景と「前期摂関政治」の成立（1）——官衛軍事機構の内部矛盾——」（『政治経済学』二〇・一九六四年九月）。

熊谷保孝「藤原良房政権下の神祇」（『神道宗教』第一一六号・昭和五十九年九月）

#### ●史料

史料の頭の数字は西暦、（ ）は筆者補足、（ ）は割注、

【晏子内親王】母、藤原列子（則子）は雄女／同母姉妹、慧子内親王／最終位、无品

850（嘉祥三年七月九日）甲申。皇女晏子内親王爲伊勢齋。惠子内親王爲賀茂齋。大祓於建礼門前。以命兩齋内親王也。』從四位下藤原朝臣古子。无位東子女王。藤原朝臣年子。藤原朝臣多賀幾子。藤原朝臣是子等爲女御。『文徳天皇実録』

850（嘉祥三年七月九日）文徳天皇：齋宮：晏子内親王（帝一女■／三年卜定）：皇女：晏子内親王（嘉祥三年七月爲伊勢齋天安二年退之昌泰三年七月二十日薨）『一代要記』

850（嘉祥三年八月八日）癸丑。遣散位正五位下楠野王。神祇少祐正六位上中臣朝臣■守等。向伊勢太神宮。告以晏子内親王爲齋。

#### 『文徳天皇実録』

851（仁寿元年）宴子内親王。文徳皇女。在任六年。仁寿元年。

#### 『齋宮記』

800 昌泰三年七月二十日

晏子内親王（齋宮。母藤原則子。從四位上是雄女）頭注（子）又云、昌泰三年七月廿日、前齋宮晏子内親王薨。『本朝皇胤紹運録』

文徳天皇：皇女：晏子内親王（母藤原列子從五位上是雄女也伊勢齋宮）：齋宮晏子内親王（帝第／八女）『帝王編年記』

皇女。晏子内親王『皇代記』

【慧子内親王】母、藤原列子（則子）是雄女／同母姉妹、晏子内親王／最終位、无品

850（嘉祥三年七月九日）甲申。皇女晏子内親王爲伊勢齋。惠子内親王爲賀茂齋。大祓於建礼門前。以命兩齋内親王也。』

從四位下藤原朝臣古子。无位東子女王。藤原朝臣年子。藤原朝臣多賀幾子。藤原朝臣是子等爲女御。『文徳天皇実録』850（嘉祥三年）慧子内親王（齋院。嘉祥三年卜定。但被薨。其事秘之。世莫知之。母同（晏子）頭注（リ）三代実録、元慶五年正月六日、无品慧子内親王薨。『本朝皇胤紹運録』

850（嘉祥三年）文徳天皇：齋院：惠子内親王（帝四女嘉祥三年／立之元慶五年薨）：皇女：慧子内親王（嘉祥三年七月爲賀茂齋天安元年二月薨之其事秘之世莫知者天慶五年六月薨）『一代要記』

850（嘉祥三年七月）惠子内親王。文徳天皇第八皇女也。母藤原列子。嘉祥三年七月卜定。大祓於建禮門。仁寿二年四月。惠子禊於河濱。始入齋院。天安元年二月薨之。遣右大臣正三位藤原良相於神社。告事由。其事秘。故世無知之。『賀茂齋院記』

852 仁寿二年四月。惠子禊於河濱。始入齋院。『賀茂齋院記』

853（仁寿三年七月一日）甲戌。治部少輔兼齋院長官從五

位下藤原朝臣關雄卒。關雄者。刑部卿從三位眞夏第五子也。  
(中略)六年授從五位下。累遷嘉祥四年爲治部少輔。仁壽  
二年兼齋院長官。以病辭退。遂不被免。卒時四十九。(後略)  
『文德天皇實錄』

853 (仁壽三年四月七日) 丁卯。從五位下藤原朝臣岑主爲  
齋院長官。

『文德天皇實錄』

854 (齊衡元年二月十六日) 橘朝臣春成爲齋院長官。

『文德天皇實錄』

857 (天安元年二月二十八日) 丙申。廢鴨齋內親王惠子。

更立无品述子內親王爲齋內親王。遣右大臣正三位藤原朝臣  
良相於神社告事由。其事秘者。世無知之也。『文德天皇實錄』

857 (天安元年二月) 文德天皇：皇女：慧子內親王 (母同  
晏子賀茂齋院天安元年二月薨之其事秘之世莫言之)：齋院慧  
子內親王 (帝第／九女)

『帝王編年記』

881 (元慶五年正月六日) 乙卯。勅曰。豈先帝託六尺之孤、  
寄四海之命之本情乎。三讓雖高、方機多端。宜屈独善之心、  
俯諸百官之聽。是日。无品慧子內親王薨。不任緣葬諸司。

以喪家之辭也。內親王者、文德天皇之女、母從五位上藤原  
朝臣是雄之女也。」

『三代實錄』

皇女。惠子內親王『皇代記』

田村帝の御時に、齋院に侍りける慧子の皇女を、「母あやま  
ちあり」といひて齋院を代へられむとしけるを、そのこと  
やみにければよめる 尼敬信

大空に照りゆく月し清ければ雲隠せども光消なくに  
『古今和歌集』八八五番歌